日本人と失われた芸術の楽しみ

大阪芸術大学　教養課程　教授　純 丘 曜 彰

江戸時代、日本は驚くべき芸術大国だった。中世までの和歌、茶や能が、公家や武家の必須となり、また、武芸に代わって読み書き算盤が武家や商家の実学となる一方、文楽や歌舞伎、浮世絵のような娯楽芸能が登場し、とくになにかの役に立つわけでもない囲碁将棋、俳諧、三味線、和算、活花のような庶民の習事や学芸が隆盛した。

江戸の娯楽芸能については、大阪の元禄文化を起点とする。幕藩体制の整備とともに日本は米本位制となり、その換金のために大阪に各大名家の蔵屋敷が置かれ、また、ここと大消費地の江戸を繋ぐ菱垣船・樽廻船、また、東廻り西回り航路、そして北前船の物資輸送とともに、その文化が普及した。つまり、それは富裕商家の娯楽として醸成され、江戸後期の化政文化に至って大衆化していく。

これらの文楽や歌舞伎、浮世絵などは、マスメディアとしての意味を持っていた。もとは中世の語り物、浄瑠璃に発し、当初は寺社霊験譚や源平戦記物などの時代物だったが、竹本義太夫・近松門左衛門のころからドラマ性を高め、当代の事件を取り上げた世話物も人気となっていく。（中には『忠臣蔵』のように、幕府を憚り、世話物ながら時代物を装うこともあった。）同様に、浮世絵も、当代の人気の役者や美人、観光地を採り上げ、草双紙とともに、文楽や歌舞伎の達しないところまで情報を広めた。

また、庶民の側からも、高い文化が芽生えてくる。文治への転換とともに、血なまぐさい武芸試合が敬遠される一方、囲碁四家、将棋三家が幕府に抱えられ、固定された身分制にあって、将軍や大名から庶民まで、対等に実力で競い合える場として、御城勝負を頂点に各家門弟が切磋琢磨した。また、和歌の長い伝統を踏まえた重厚な寺社や武家の連歌に代わって、諧謔や洒脱、破礼、揶揄に溢れた俳諧や川柳（狂句）が人気となり、貞門派、談林派、芭蕉、蕪村、一茶などが多くの弟子を率いることになる。

三味線は、琉球から渡来し、琵琶法師たちによって完成された江戸時代の新しい楽器で、文楽歌舞伎（浄瑠璃）の伴奏（常磐津）として広まるとともに、ここから派生して、小歌曲を連ねた地歌、さらには五七調の独自の長唄として新たに作曲され、さらには演奏を主とする手事物としても発展する。また、アイドルとして三味線を弾いて角付けをする女太夫が、廻船とともに全国を回り、人気を集める。ただし、これは非人扱いだった。

にもかかわらず、この三味線が、一般子女の手習いとして爆発的に町村で普及する。当初は行儀見習いを兼ね、良家への嫁入りに有利とされていたことがあったようだが、女師匠めあてか、大人の男性も習い通い、長唄から民謡まで、幅広く奏でられるようになっていく。ここでは、室内演奏であるため、バチを使わない爪弾きで、小唄が好まれた。しかし、江戸後期の天保の改革（1830～43）では、民間の三味線は奢侈として禁止された。

また、江戸時代になると、それまでの算木に代わって算盤が普及し、米本位の収税に伴い、大名家や村落の測量や収支に用いられ、武家はもちろん庶民の寺子屋でも必須科目ともなっていく。『塵劫記』（1627）などもまた、この算盤の実践的応用問題として生まれてきたものだった。しかし、算盤の四則演算だけでは解けない難問もあり、関孝和（？～1708）らが中国の古い天元術を応用して代数学の基礎を打ち立て、一派を成す。そのほかにも各地に流派が乱立し、家元免許制を整え、寺社の算額を通じて競って多くの弟子を集めた。しかし、土木測量などを除けば、これらの和算は実用性の無い趣味だった。

活花は、供花として寺社に生まれ、公家や武家で嗜まれてきたが、それまでの立花や投入に対し、江戸後期の化政文化で、綺麗寂びを好む小堀遠州を祖とするとされる遠州流の名人たちによる、技巧と意匠をこらした奇矯な曲生けが話題を集め、多種多様な花器の販売とともに、庶民の習い事としても確立されていった。なお、茶道は、この時代、以前よりむしろ武家に限定されたものとなり、庶民には普及していない。

安寧な世にあって固定した身分が、人々に差異を求めさせる。しかし、今日の学歴や収入、持物に差異を求める一元的な風潮に較べると、江戸時代は多元的で、落語にあくび指南が揶揄されているように、それに近いかなりくだらないものまで、多種多様な習い事が江戸時代にあって、それらでも弟子がつき、それぞれに師匠として成り立った。また、そんな中に、宮本武蔵や西鶴、北斎、源内など、諸芸万能人が生まれ、多方面で活躍した。社会の文化的な豊かさとして、どちらがおおらかであったか、論じるまでもあるまい。